

きみは今、百メートルを何秒で走ることができますか？私は？と記憶を辿れば、半世紀前の高校2年生の体育大会を最後に、百メートルを全力で走る自分を置いてきてしまったように思います。そのように真っ直ぐな気持ちで挑もうとする私を遠くに置いてきてしまったこと、百メートルを思いっきり走ろうと思う自分がもうここにいないことに、寂しく心が疼きます。

でも、と、思います。その百メートルを全力で走る自分は遠くになってしまいましたが、そこで育てられてきた私は、チャレンジするところは、すがたを変えて現在の私の中に生き続けていて、直面する困難から目をそらそうとするとき、逃げずに、しっかり、ていねいに、私を促し励ましてくれる、と。

66年生きてきた私も、心して耳を傾けて今日を生きたら、初めて耳に入ってくる言葉に出会います。若い君たちはなおさら、生まれてから今まで耳にしたことのない言葉があふれているのではないのでしょうか。未知のこと、未経験の世界に包まれている私たちです。わくわくしませんか？

人は誰もが限界を手前に引いてしまう、ということばを読んだことがあります。こういうがんばりをするにはちょっと気恥ずかしいとか、もうここまでが限界と自分を見切ってしまう。でも、少し無理をしても、そこから進めることがなければ、先へ行くことはできない。新しい自分を知ることはできない。「ここまで」「これだけ」と思ってきたことの〈向こう〉に行く。〈向こう〉が確かにある。そのような〈向こう〉の経験を重ねる。うまくいかないとき、何かを理由に弱音を吐くのではなく、そのことをチャレンジする可能性として受けとめる。

しかし、それは私だけでなされるものではありません。「わたしたち」の恵みとして受けるのだと思います。大谷がそのような〈向こう〉とゆたかに出会う、「新しい私たち」のはたらきあう時と場であるようにと願っています。



飯山 等
学校長

きみの、
新しい私たちが始まる。

